



Title	『説文解字繫傳』に於ける指事について
Author(s)	坂内, 千里
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2024, 1, p. 77-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94800
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『説文解字繫傳』に於ける指事について

坂内 千里

On ideograms 指事 in the *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan*

Chisato SAKAUCHI

The *Shuo-wen jie-zi xi-zhuan* (i.e. Xiao-Xu-ben), written by Xu Kai in the Southern Tang era, consists of two portions. The first 30 volumes contain his annotations upon the *Shuo-wen jie-zi* which is the oldest existing dictionary, and are named *Tong-shi pian*. In the latter 10 volumes, Xu Kai's original argument is developed.

This paper examines how Xu Kai views ideograms 指事 and the features of his view of ideograms in comparison with his view of hieroglyphs 象形 and compound ideograms 會意.

一 はじめに

南唐 徐鉉（921-975：以下、小徐と稱する）の著した『説文解字繫傳』は、現存する最古の字書である『説文解字』の全體を通して注釋を施した最初の著作である。『説文解字繫傳』（以下、小徐本と稱する）は、『説文解字』（以下、『説文』と稱する）の許慎の解である説解に對して注釋を施した「通釋篇」30卷に、「部敘篇」2卷などの論10卷を合わせた全40卷から成る。

小徐は、「通釋篇」に注釋を施す際に、しばしば文字の構造（六書）についても言及している。六書のうち會意と形聲については既に論じた¹⁾ので、本論文では、小徐が指事をどのように捉えているかを、象形・會意と比較しながら考察する。

なお、本論文では、最も善本と稱せられる道光十九年（1839）壽陽祁氏（嵩藻）據景宋鈔本重刊本の影印である中華書局本（1987年：以下、祁刻本と稱する）を底本として使用し、引用に際しては、特に必要がない限り、反切を省略する。また、兄徐鉉等の校訂本（以下、大徐本と稱する）、及び段玉裁『説文解字注』（以下、段注と稱する）を適宜參照する。大徐本は同治十二年（1873）陳昌治改刻一篆一行本（中華書局 1983年第7次印刷版）を、段注は經韻樓

1) 拙著「『説文解字繫傳』中の會意・形聲について」（『言語文化研究』第48號 大阪大學大学院言語文化研究科 2022年）77-91頁參照。

本（臺灣藝文印書館 1979 年第 5 版）を使用する。承培元『說文解字繫傳校勘記』（以下、校勘記と稱する）については、中華書局本に附刻されているものを使用する。

また、本文中の数字は、原則として序数は漢数字で、数値は算用数字で表記する。また、本論文は原則として舊字體を用いるが、使用フォントの制限により舊字體になっていないものもある。

二 小徐本説解における六書の分布概況

小徐本は、傳本がきわめて少なく、北宋には既に卷二五・三十の兩卷を缺いており、卷三十は後に得られたが、卷二五は失われたままで、大徐本の該當部分で補っている。そのほかの卷でも、缺字を補うため大徐本の記述がそのまま竄入されている。この竄入部分は、各文字の條の最後に付されている反切が「某某反」ではなく「某某切」となっているので、すぐに區別できる²⁾。

本論文では、「通釋篇」全 30 卷中、「敘」2 卷、及び原本が失われた卷二五を除く 27 卷を調査対象とする。正確を期すためには、ほかの卷に大徐本に基づき竄入されたものも排除すべきであるが、概況にはそれほど大きな影響がないと考えるため、卷二五を排除するだけに止めた。

次に、六書の分類方法を、例を参照しながら簡単に説明する。

- 气 雲气也、象形、凡气之屬皆從气、臣鍇曰、象雲气之兒、(略) 【卷一 气部】
 屯 難也、象艸木之初生、屯然而難、從中貫一、一地也、尾曲、(略) 【卷二 中部】
 天 顛也、至高無上、從一大、臣鍇曰、通論備矣、會意 【卷一 一部】
 祭 祭祀也、從示以手持肉 【卷一 示部】
 吏 治人者也、從一從史、史亦聲、臣鍇曰、(略) 凡言亦聲、備言之耳、義不主於聲、會意 【卷一 一部】
 丕 大也、從一不聲、臣鍇曰、古音不若夫、故得不爲丕字之聲也 【卷一 一部】
 齒 口斷骨也、象口齒之形、止聲、(略) 【卷四 齒部】

まず「象形」は、「气」のように、説解に「象形」、或いは「象」出形、有枝莖也（「^すみ出づ

2) 『欽定四庫全書總目提要』經部・小學類「說文繫傳四十卷（兵部侍郎紀昀家藏本）」の項に、「卷末有熙寧中蘇頌記、云、舊闕二十五・三十共二卷、俟別求補寫、此本卷三十不闕、或續得之以補入、卷二十五則直錄其兄鉉所校之本、而去其新附之字、殆後人求其原書不獲、因摭鉉書以足之、(中略)其餘各部闕文亦多取鉉書竄入、考鉉書用孫愐唐韻、而鍇書則朝散大夫行祕書省校書郎朱翱別爲反切、鉉書稱某某切、而鍇書稱反、今書內音切與鉉書無異者、其訓釋亦必無異、其移掇之迹顯然可見」とある。

る形に象り、枝莖有るなり）」（卷二 中部「屮」）のように「象某某形」とあるものとする。次に「會意」は、「天」のように、説解に「從某某」とあるもの、或いは「祭」の條に「示に従い、手を以て肉を持つ」のように、構成要素間³⁾の關係を示す語句があるものとする。また、「屯」のように、象形（艸木の初めて生じ、屯然として難きに象る）と會意（屮の一を貫くに従う）を併せたものを、「象形＋會意」とする。「形聲」は、「丕」のように「從某某聲」と構成要素の1つが聲符となっているものとする。また、「吏」の條では、構成要素の「史」が意符であると同時に聲符にもなっている。このような場合、普通「亦聲」と呼ぶが、本論文では「會意＋形聲」とする。最後の「齒」のように象形（口齒の形に象る）と聲符を併せたものを、「象形＋形聲」とする。「指事」については、「指事」と許慎が指定しているもののみとする。

以上に基づき、説解では文字構造をどのように分析しているかをまとめたものが「表1」である。六書の分布の概況を見るためのものであるから、10以下を四捨五入した概数で示す。但し、指事のみ總数が少ないため、實数で示す。なお、説解に文字の構成についての記述がないものや、文字の構成について「闕」としており、カウントできないものも若干数存在する。

表 1

	象形	指事	象形＋會意	會意	會意＋形聲	形聲	象形＋形聲
條數	220	2	120	840	170	7560	20

「表1」から、説解で指事とするものが、わずか2條で、ほかに比べて極端に少ないことがわかる。これは、指事には象形・會意・形聲のような定まった型がないこともその要因であろう。これに對し、小徐が注で指事であると指摘するものは68條ある。

では、小徐は指事をどのように捉え、どのような場合に「指事」と注しているのだろうか。「象形」或いは「會意」と注する場合とは、どのような違いがあるのであろうか。それを探るために、まず小徐が六書のそれぞれをどのように捉えているのかについて、考えてみよう。

三 小徐の六書論

小徐の六書に對する考えは、「上」（卷一 上部）の注、及び「疑義篇」（卷三九）に詳しい。まず「上」の注から見ていこう。六書に關する言及は「嘗試論之曰」から始まる。少し長い、基本的な考えが示されているので、一部省略しながら、順に見ていこう。

3) 漢字を構成する部分について、本論文では、「偏旁」ではなく「構成要素」と表現する。これは、日本語の「偏旁」が表す意味との微妙な差による混亂を避けるためである。詳しくは、拙著「『説文解字繫傳』「疑義篇」考（三）―「通釋篇」中の偏旁について―」（『言語文化研究』第43號）大阪大學大學院言語文化研究科 2017年3月）53頁參照。

凡六書之義、起於象形、則日月之屬是也、形聲者、以形配聲、班固謂之象聲、鄭玄注周禮謂之諧聲、象則形也、諧聲言以形諧和其聲、其實一也、江河是也、水其象也、工可其聲也、若空字雞字等、形或在下、或在上、或在左右、亦或有微旨、亦多從配合之宜、非盡有義也、(略)、六文之中、象形者蒼頡本所起、觀察天地萬物之形、謂之文、故文少、後相配合孳益爲字、則形聲會意者是也、故形聲最多

凡そ六書の義、象形より起こる、則ち日月の属は是れなり。形聲なる者は、形を以て聲に配す。班固 之を象聲と謂い、鄭玄 周禮に注して之を諧聲と謂う。象は則ち形なり。諧聲は形を以て其の聲を諧和するを言う。其の實 一なり。江河 是れなり。水は其の象なり。工可は其の聲なり。空字雞字等が若きは、形 或いは下に在り、或いは上に在り、或いは左右に在り、亦た或いは微旨有り、亦た多く配合の宜に従うも、盡く義有るに非ざるなり。(略) 六文の中、象形なる者は蒼頡の起こす所に本づき、天地萬物の形を觀察す。之を文と謂う。故に文 少なし。後に相い配合孳益し字を爲る。則ち形聲會意なる者は是れなり。故に形聲最も多し。

六書は象形から始まる。「日」・「月」の類がそうである。形聲とは形を音聲に配したもので、班固は「象聲」、鄭玄は「諧聲」と呼び名は違うが、みな同じことである。「江」・「河」がこれに当たる。「水」がその形、「工」・「可」はその聲である。「空」・「雞」等のように、形は上下左右様々なところにあり、その位置に微妙な意味があったり、その取り合せの妙に従うものも多いが、全てに意味があるわけではない。六書のうち、象形は蒼頡が始めたもので、天地萬物の形を觀察したものであり、「文」という。故に「文」は少ない。その後、「文」を組み合わせ増やして「字」を作った。形聲・會意がこれであり、形聲が最も多いと述べる。このように、六書のうち實體あるものに基づいた象形と形聲から説き始める。

この後、轉注・假借について述べる。ここでは、後の「疑義篇」の記述と合せて、その概略のみを示す⁴⁾。

4) 「上」字の注の原文は以下の通り。「轉注者、建類一首、同意相受、謂老之別名有耆、有耄、有壽、有耄、又孝子養老是也、一首者謂此孝等諸字皆取類於老、則皆從老、若松柏等皆木之別名、皆同受意於木、故皆從木、後皆象此、轉注之言、若水之出源、分岐別派爲江、爲漢、各受其名、而本同主於一水也、(略) 假借者、古省文從可知故、令者使也、可借爲使令(平)、長者長(上)也、可借爲長(上)幼、諸如此類、皆以旁字察之則可知、至春秋之後、書多口授、傳受之者、未必皆得其人、至著於簡牘、則假借文字、不能皆得其義相近者、故經傳之字多者乖異疎略(1字祁刻本缺字)、詩借害爲曷之類是也、後人妄有作文字附益之、故今假借爲少、假者不真也、借者同門也、若周禮使萬民一鄉一鄙共用祭器任器樂器是也」。更に「疑義篇」(卷三九)の関連箇所を以下に挙げる。「人毛匕(音化)爲老、壽耆耄亦老、故以老字注之、受意於老、轉相傳注、故謂之轉注、義近形聲而有異焉、形聲江河不同、灘溼各異、轉注考老實同、妙好無隔、此其分也、五者不足、則假借之、古人簡易之意也、出令(去聲)所以使令(平)、(略) 故因而假之、(略) 此聖人制字之大倫、而中古之後、師有愚智、學有工拙、智者據義而借、令長之類是也、淺者遠而假之、若山海經以俊爲舜、(略) 又有本字湮沒、假借獨行、若春秋莒盟、本宜作隸、今則爲莒省者是也、(略) 從便則假借難移論義、則宜有分別、(後略)」

『説文』の許慎「敘」に「轉注なる者は、建類一首、同意相い受く」と言う。それは「老」の別名に「耆」「耄」「壽」「耄」などがあり、「一首」とは、これらの文字が皆「老」と同種のものであり、「老」を構成要素とすることを言う。「松」「柏」などは皆な木の名前で、「木」から意味を得ているので、皆な「木」を構成要素とする。水は源を出でて分岐して江水となり、漢水となるように、同じく一水に基づくことから、轉注という。假借とは、「出令（去聲：命令する）」する故に「使令（平聲：指圖して使う）」という意味に用いるように、説明はなくとも假借した意味がわかるものである。しかし、春秋時代以降、書物を傳寫する際に口傳が多く、また書寫するにも必ずしも適切な人材を当てたわけでもないため、文字を假借するのに意味の近いものを用いることができなくなり、經傳の字に乖異するものが多くなったと言う。

この後、小徐は更に續けて六書の関係を説く。まず、象形と指事の類似性について、次のように述べる。

凡指事象形義一也、物之實形有可象者、則爲象形、山川之類皆是物也、指事者、謂物事之虛無不可圖畫、謂之指事、形則有形可象、事則有事可指、故上下之義、無形可象、故以「上」「下」指事之、有事可指也、故曰象形指事大同而小異

凡そ指事象形 義は一なり。物の實形 象るべき者有れば、則ち象形と爲す。山川の類は皆な是れ物なり。指事なる者は、物事の虛無にして圖畫すべからざるを謂う。之を指事と謂う。形なれば則ち形の象るべき有り。事なれば則ち事の指すべき有り。故に上下の義は形の象るべき無し、故に「上」「下」を以て之を指事す。事の指すべき有るなり。故に象形指事は大同にして小異と曰う。

指事と象形は、意味するところは同じである。山川のように物の形に象ることができるものは象形とする。指事とは虚無であり描くことができない物事で、上下のように指し示すことができる事があるものは指事とすると言う。

次に會意と形聲、更に形聲と轉注の関係を論じる。

會意亦虛也、無形可象、故會合其意、以字言之、止戈則爲武、止戈戢兵也、人言必信、故曰比類合義、以見指撝、形聲者實也、形體不相遠、不可以別、故以聲配之爲分異、若江河同水也、松柏同木也、江之與河但有所在之別、其形狀所異者幾何、松之於柏、相去何若、故江河同從水、松柏皆作木、有此形也、然後齟齬其聲以別之、故散言之則曰形聲、江河可以同謂之水、水不可同謂之江河、松柏可以同謂之木、木不可同謂之松柏、故曰散言之曰形聲、總言之曰轉注、謂耆耄耄壽皆老也、凡五字試依爾雅之類言之、耆耄耄壽老也、又老壽耄耄耆、可同謂之老、老亦可同謂之耆、往來皆通、故曰轉注、總而言之也

會意も亦た虚なり。形の象るべき無し。故に其の意を會合す。字を以て之を言え、止戈は則

ち武と爲す。戈を止むるは兵を戢むるなり。人の言は必ず信あり。故に類を^{あわ}比せ義を合せ、以て指^さ搗^すところを見^{あらわ}すと曰う。形聲なる者は實なり。形體相い遠からず、以て別つべからず。故に聲を以て之に配し分異を爲す。江河の若きは同じく水なり。松柏も同じく木なり。江の河と但だ在る所の別有るのみにして、其の形状の異なる所の者は幾何ぞ。松の柏より相い去ること何若。故に江河は同じく水に従い、松柏は皆な木に作る。此の形有るなり。然る後に其の聲を^あ齟^そわせて以て之を別つ。故に之を散言すれば則ち形聲と曰う。江河は以て同じく之を水と謂うべきも、水は同じく之を江河と謂うべからず。松柏以て同じく之を木と謂うべきも、木は同じく之を松柏と謂うべからず。故に之を散言して形聲と曰うと曰う。之を總言して轉注と曰うは、耆・耄・耄・壽は皆な老なるを謂う。凡そ五字 試みに爾雅の類に依りて之を言えば、耆・耄・耄・壽は老なり、又た老・壽・耄・耄は耆なり、同じく之を老と謂うべく、老も亦た同じく之を耆と謂うべし。往來皆な通ず。故に轉注と曰う。總じて之を言うなり。

會意もまた虚であり、象るべき形がないので、その意味を合わせる。「止」「戈」(戈を止める)を合わせて「武」とするようなものである。故に「類を^{あわ}比せ義を合せ、以て指^さ搗^すところを見^{あらわ}す」(許慎「説文」)と言う。(それに對し)形聲は實である。形態が似通っており、區別できないので、音聲を組み合わせて區別する。「江」と「河」、「松」と「柏」は同じく川であり、木である。「江」と「河」は所在が異なるだけで、形状にはほとんど違いがなく、「松」と「柏」もその違いはわずかである。そこで「江」「河」は「水」を、「松」「柏」は「木」を構成要素とする。まず形があり、それから音聲を合せて區別する。「江」と「河」は同じく川であり、「松」と「柏」は同じく木であるが、川は「江」または「河」とは言えず、木は「松」または「柏」とは言えない。そこで「^{わけ}散て形聲と言う」と言う。總言すれば轉注と言うとは、「耆」・「耄」・「耄」・「壽」は皆な「老」であることを言う。「耆は老である」とも「老は耆である」とも言える。故に「轉注は總じて之を言う」と言う。ここでは會意と形聲は虚實の違い、形聲と轉注は「^{わけ}散て之を言う」と「總じて之を言う」の違いであると言う。

大凡六書之中象形指事相類、象形實而指事虚、形聲會意相類、形聲實而會意虚、轉注則形事之別、然立字之始、類於形聲、而訓釋之義、與假借爲對、假借則一字數用、如行莖行杏行杭行沆、轉注則一義數文、借如老者直訓老耳、分注則爲耆、爲耄、爲耄、爲壽焉、凡六書爲三耦也、(後略)

大凡そ六書の中、象形指事相い類す。象形は實にして指事は虚なり。形聲會意相い類す。形聲は實にして會意は虚なり。轉注は則ち形事の別、然れば字を立つるの始めは、形聲に類す。而るに訓釋の義は、假借と對を爲す。假借は則ち一字數用なり。行莖・行杏・行杭・行沆の如し。轉注は則ち一義數文なり。借如老なる者を直訓すれば老なるのみ。分けて注すれば則ち耆爲り、

耄爲り、耄爲り、壽爲り。凡そ六書は三耦爲るなり。（後略）

六書の内、象形と指事、形聲と會意は似ており、象形と形聲は實で、指事と會意は虚である。轉注は虚實の別、字の構成面では形聲に似ているが、字義の解釋面では假借と對をなす。假借は一字數用（例えば、「行」は「ゆく（音莖）」、「行い（音杏）」、「列（音杭）」、「排行（音沆）」）、轉注は一義數文（例えば、「耆」・「耄」・「耄」・「壽」は皆な「老」である）である。この小徐の六書説は「凡六書爲三耦也」から、六書三耦説と呼ばれている。

それでは、次に「疑義篇」（卷三九）の記述を見ていこう。重なる部分が多いので、省略しながら見ていく。

始於八卦、瞻天擬地、日盈月虧、山拔水曲、金散土重、木挺而上、草聚而下、皆象形也、無形可載、有勢可見、則爲指事、上下之別、起於互對、有下而上、上名所以立、有上而下、下名所以生、無定物也、故立一而下上引之、以見指歸、故曰指事、會意者人事也、無形無勢、取義垂訓、故作會意、載戢干戈、殺以止殺、故止戈則爲武、君子先行其言、而後從之、去食存信、故人言必信、無形可象、無勢可指、無意可會、故作形聲、江河四瀆、名以地分、華岱五嶽、號隨境異、逶迤峻極、其狀本同、故立體於側、各以聲韻別之、六書之中、最爲淺末、故後代滋益多附焉

始め八卦に於いて、天を瞻^み、地に擬^{なぞら}う。日は盈ち月は虧^かく。山は拔きんで水は曲がり、金は散じ土は重く、木は挺^{ぬきん}でて上り、草は聚まりて下がる。皆な象形なり。形に載する可き無く、勢に見^{あらわ}す可き有らば、則ち指事爲り。上下の別は、互對より起こる。下有りて而して上あり。上の名の立つ所以なり。上有りて而して下あり。下の名の生ずる所以なり。定物無きなり。故に一を立てて而して下上に之を引く。以て指歸するところを見す。故に指事と曰う。會意なる者は人事なり。形無く勢無し。義を取りて訓を垂る。故に會意を作る。戢^{すなわ}ち干戈を戢^{あつ}む。殺以て殺を止む。故に戈を止むるを、則ち武と爲す。君子は先ず其の言を行い、而る後に之に従う。食を去りて信を存す。故に人の言は必ず信あり。形の象るべき無く、勢の指すべき無く、意の會すべき無し。故に形聲を作る。江河四瀆、名は地を以て分かつ。華岱五嶽、號は境に隨いて異なる。逶迤峻極、其の狀 本と同じ。故に體を側に立て、各 聲韻を以て之を別つ。六書の中、最も淺末爲り。故に後代滋益し多く焉に附す。

まず天地にある事物になぞらえて「象形」ができる。（象るべき）形がないが、表現すべき勢があれば、指事となる。上下は相對的なもので、定まった物がない。そこで「一」の上下に線を引くことで指し示す。故に指事という。會意とは人事であり、「形」も「勢」もないので、それぞれの構成要素の意味を用いて字訓とする。象るべき形もなく、指し示すべき勢

もなく、合せるべき意もないので、形聲ができる。江河四瀆・華岱五嶽はその形状では區別できない。そこで形（體）を立てて、その音で區別する。六書の中で最も淺薄であるため後の世では増えていった、とする。この後には轉注・假借の説明が續くが、「上」の注で併せて見たので、ここでは省略する。

このような小徐の六書についての理論は、後に「六書三耦説」と呼ばれる。それは、象形と指事、會意と形聲を、虚實という觀點から對とし、轉注と假借を「一義數文」と「一字數用」として對とするものである。このうち象形・指事・會意・形聲は、文字を構成する際に用いられる方法であるが、轉注と假借は、そうしてできた文字間の關係を論じるものである。後に戴震が提唱した「四體二用説」⁵⁾(象形・指事・會意・形聲の4者は、文字の構成理論であり、轉注・假借の2者は、文字の用を説くものであるという考え方)に影響を与えたと言えよう。

六書に関する研究は、小徐以降數多く行われてきており、「六書三耦説」は後の研究に様々な影響を与えている。近年では、古敬恆氏がその著書の中⁶⁾で、詳しく論じている。

古氏は「六書三耦説」に對しては、初めて(漢字を構成する際の)形義の結びつき方の異なる特徴から、虚實に基づき、異なるタイプに分け、ある程度六書の内部規律に觸れた⁷⁾と評價し、戴震・段玉裁ら後世の學者に大きな影響を与えたとする。しかし、小徐が指事とする文字に對しては、後世の學者の説に基づき、1) 小徐の説が正しいもの、2) 異なる見方があるもの、3) 間違いだとされるものに分けて説明し、指事ではないものが多く含まれると結論づけている。その原因として、小徐が「虚」に對して正確にその原則を理解していないことを挙げ、更に小徐が文字ではない構成要素を全て指示性の符號と見なし、全て「虚」としていると批判し、指事の「虚」の部分の働きは、何かを指し示すことにあって、形を構成することにはないとして、「眉」「桀」「俎」を例に挙げる⁸⁾。

この古氏の説には、1) 後世の學者の説(甚だしくは出土資料に基づき許慎の説解の誤りを指摘したものも含む)に基づき、その正誤を判斷していること；2) 小徐が文字ではない構成要素を全て指示性の符號と見なしとしているが、用例に基づいた説明はなく、その是非が判斷できない；という2點の問題があると考ええる。

そこで、次に、小徐が指事と注するものを、會意・象形と注するものと比較しながら、詳細に検討し、小徐の指事に對する考えを明らかにし、古氏の批判の妥當性についても考えることとする。

5) 『戴東原集』卷三「答江慎修先生論小學書」參照。

6) 『徐鍇《說文繫傳》研究』の第三章第一節「“六書三耦”說與漢字的形體分析」(重慶大學出版社 1995年 41-60頁)

7) 同上書 43頁。

8) 同上書 47-49頁。

四 小徐の指事

それでは次に小徐が「指事」と注するものについて詳しく見ていこう。「指事」と注するものは、全 68 條ある⁹⁾。それらを説解における文字の構成を解く部分の記述により、分類して見ていく。

A 説解でも「指事」とするもの

1. 上 高也、此古文上、指事也、凡上之屬皆從上、臣鍇曰、本乎天者親上、故曰指事、班固謂之象事、（後略）【卷一 上部】

省略した部分に、先に見た「六書三耦」説が續く。「上」が指事である所以については、先に見たように、上下は相対的なもので、定まった物がないため、「一」の上下に線を引くことで指し示すと説明する。なお、説解に「指事」と言うのは、この「上」のほかには「鼻馬後左足白、從馬、二其足、讀若注、易曰爲鼻足、指事」（卷十九 馬部）があるが、「鼻」の條には小徐は注を付けていない。

B 説解に「從某某」或いは「從某從某」とするもの

このタイプのものは、9 條ある。そのうち 1 條は、重文にも「指事」と注している。それぞれの條について、小徐が指事とする根拠を探っていこう。

次の「卉」の條では、注に「指事」と言うのみで、なぜ指事なのかについての説明がない。

2. 卉 艸之總名也、從艸中、臣鍇曰、此指事 【卷二 艸部】

この「從某某」或いは「從某從某」という形は、會意を示す典型的な形である。實際、段氏（一下 艸部）はこの「从艸中」に對して、「三中卽三艸也、會意」と注している。この兩者の判断の違いをもたらしたものの、小徐が指事と會意をどのように區別していたかを探るため、もう少し他の例を見ていこう。

3. ㄥ 臂上也、從又從古文ㄥ 臣鍇曰、臂上一節也、指事

ㄥ 古文ㄥ、象形 臣鍇曰、此既象形、宜學人曲肱而寫之乃得、其實不爾、卽多相

9) 注 6) に挙げた古氏の書の 47 頁で、「小徐が明確に指摘した指事字は 65 條ある」とする。おそらく「𠂔」（例文 28）のようなものを省略したと思われるが、詳細は不明である。

亂也 【卷六 又部】

4. 寸 十分也、人手卻一寸動脈謂之寸口、從又一、凡寸之屬皆從寸、臣鍔曰、一者記手腕下一寸、此指事也 【卷六 又部】
5. 刃 傷也、從刃從一、臣鍔曰、一刀所傷、指事也 【卷八 刃部】

「ㄥ」の條では「臂上の一節なり。指事」と言い、「寸」では「一なる者は手腕の下一寸を記す。此れ指事なり」、「刃」では「一刀所傷、指事也」と言うように、第二の構成要素は第一の構成要素の表す意味と関連するある場所を示しているのであり、文字「古文ム」・「一」として用いられているのではないと考えている。従って、二つの構成要素の持つ意味を組み合わせることで別の意味を表すのではないことから、會意ではなく指事であるとわざわざ注したと考えられる。

6. 榮 槎識也、從木夨、闕、夏書曰、隨山榮木、讀若刊、臣鍔曰、槎識謂隨所行、林木衰斫其枝、爲道表識也、夨蓋其斫木低折狀、許慎言闕、無聞于師也、隨其所行、山路榮之、如史記述黃帝披山通道是也、指事
- 𣎵 篆文、臣鍔曰、亦指事也 【卷十一 木部】

「榮」でも「夨は蓋し其の木を斫り低く折るの状なり」とあり、その篆文「𣎵」にも「指事」とのみ記す。これらは、いずれも「夨」「𣎵」の部分が、木をそのような形に切り道しるべとすることを表したもので、文字ではないと考えていることを示すものである。従って「榮」「𣎵」は、「寸」等と同じく、「木」と文字ではない「夨」「𣎵」を組み合わせで作られたものであり、會意ではなく指事であるとわざわざ注したのではないだろうか。次の「爭」も同様である。

7. 爭 引也、從受廌、臣鍔曰、廌所爭也、指事 【卷八 受部】

「爭」は「受」「廌」の2つの構成要素からなる。「受」（卷八 受部）には「物落つるに上下相付するなり。爪又に従う。（物落上下相付也、從爪又）」とあり、小徐は「爪は覆手なり。又は仰手なり。（爪覆手也、又仰手也）」¹⁰と注する。物が落ちてきたのを下向きの手と上向きの手で受けることを表す。「廌」について小徐は「廌は争う所なり」と注しているように、「廌」は文字ではなく、2本の手が争って引き合っている対象物を示すものにすぎないと考えている。文字と文字ではないものから成るため、指事であると注すると考えられる。

10) それぞれ「爪 𠂔也、覆手曰爪、象形」（卷六 爪部）、「又 手也、象形、三指者、手之列多、略不過三也」（卷六 又部）とある。

ところで、「𠬞部」はわずか9つの正文からなる部であるが、文字の構成が「從某某」となっている條が4條あり、小徐は、うち1條には「指事」と注し、2條には「會意」と注している。「指事」と注するのは「爭」（例文7）の條である。では次の「會意」と注するものと、どのような違いがあるのであろうか。

8. 爰 引也、從𠬞于、籀文以爲車轅字、臣鍇曰、爾雅爰粵于也、會意 【卷八 𠬞部】

9. 𠬞 所依據也、從𠬞工、讀與隱同、臣鍇曰、工正也、會意、𠬞從此 【卷八 𠬞部】

「爰」も「𠬞」もともに文字の構成は「從𠬞于」・「從𠬞工」となっており、「爭」の「從𠬞𠬞」とは「𠬞」のほかの構成要素が異なるのみである。つまり、この二番めの構成要素の違いが、一方には「指事」と注し、一方には「會意」と注するという異なる判断を下した根拠となると考えられる。では、その違いとは何であらうか。

「爰」では、「爰、粵は于なり」という『爾雅』「釋詁」の文を引用して會意である説明としている。段氏はこの「爰」の條の注（四下 𠬞部）に『古今韻會舉要』（上平聲十三元韻）は「爰」の説解を引用して「引也、謂引詞也」としていることを指摘した上で、「爰」・「粵」・「于」は皆「引詞」であるとする。因って「于」は聲を引き延ばすことから、字義と関係を持つと考え、會意であるとしたと考えられる。「𠬞」では、「工」には「正しい」という意味があるとして、「依據する所なり」という意味は、受け取るという意味の「𠬞」と正しいという意味の「工」から成るとする。やはり、2つの構成要素の意味を合せて字義とする會意であるとしている。

従って「爭」では、文字である構成要素と文字ではない構成要素を組み合わせる字義を形成していたのに對し、「爰」・「𠬞」では文字同士の構成要素を組み合わせる字義が創出されているという點に相違があると考えられる。

小徐が「指事」と注するもののうち、文字構成を説く説解が「從某某」或いは「從某從某」である全9條中、残りの3條はどのようなになっているだろうか。

10. 𠬞 相擊中也、如車相擊、故從𠬞從𠬞也、臣鍇曰、𠬞車軸也、此指事 【卷六 𠬞部】

ここで「𠬞は車軸なり」と言うのは、「𠬞」の下部分を指す。「𠬞」（卷二七 車部）の説解には「車軸の端なり。車に従う、𠬞の形に象る。（車軸端也、從車、象𠬞之形）」とあり、小徐は「指事」と注するのみであるが、段氏は「□を以て𠬞の端の孔に象るを謂う。而して車の中直を以て、軸の外に出づるに象る。（謂以□象𠬞端之孔、而以車之中直、象軸之出於外）」（十四上 車部）と注している。これに依れば、小徐がここで「𠬞は車軸なり。此れ指事」と言うのは、

「害」が「車」と車軸の端の穴を示す「𠂔 (ム)」から成ることを表しており、やはり、文字と文字ではない構成要素の組み合わせに對して「指事」と注していると考えられる。

しかし、次の2例は、どちらも文字と文字の組み合わせから成るように見える。

11. 𦵏 滑也、詩云、𦵏兮達兮、從又中、一曰取也、臣鍇曰、中枝順也、順則滑也、指事 【卷六 又部】
12. 𦵏 鳥張毛羽自奮、從大佳、凡𦵏之屬皆從𦵏、讀若睢、臣鍇曰、大張大兒也、指事 【卷七 𦵏部】

この2字と「𦵏」(例文2)は、いずれの構成要素も文字であり、一見會意との相違点がないように見える。しかし、小徐が「𦵏」には「中は枝順なり。順ならば則ち滑るなり」と注しているのは、「中」を「木の初めて生ずるなり」(卷二 中部)という意味の文字ではなく、枝が上向きに生えた草の形で、それを手に持つと滑りやすいことから字義を得ていると考えていることを示す。この「中」については、段氏もその注に「按ずるに中に従うは未だ其の意を詳らかにせず。蓋し又に従う、𦵏の省聲ならん。(按從中未詳其意、蓋從又𦵏省聲)」(三下 又部)と述べるように、その意味が明確ではなく、考えが分かれるところである。「𦵏」についても、小徐は「大は、張ること大なる兒なり」と注している。これは、「𦵏」が「大きな佳」ではなく、「鳥の毛羽を張り自ら奮す」を意味する文字であることから、「大」は文字「大」としてではなく、鳥が羽を大きく張るさまを表すものとして用いられており、會意ではなく指事であるとするのだと考えられる。つまり、文字の一部に象形的、或いは繪畫的要素が含まれており、それが字義の形成とも深く関わると考えた時、會意ではなく指事であるとするのではないだろうか。

「𦵏」については、「𦵏」・「𦵏」に準じて考えれば、芽生えたばかりの草木(木初生也、古文或以爲艸字)を表す「中」と、様々な草(百艸也)を表す「艸」の字義を合せて、草の總稱という字義(艸之總名也)を得たのではなく、「中」と「艸」は單に多くの草が生えているさまを表すに過ぎないと考えたため、「指事」としたとも考えられる。しかし、同じ構成要素を3つ重ねた構造を持つ「森」(卷十一 林部)、「𦵏」(卷十九 馬部)には特に文字構造についての言及はなく、「𦵏」(卷十八 石部)、「𦵏」(卷十九 犬部)では「會意」としている。その理由を述べていないため、なぜ一見同じ構造を持つと見えるものが、異なる構造を持つとするのか判断できない。なお、この点については、ここでは問題点の指摘に止め、後に再度取り上げる。

以上、説解が、會意を示す典型的な形「從某某」或いは「從某從某」である時に、小徐が「指事」とすると注する場合について考察してきた。「𦵏」については、判断が困難であるが、

そのほかの例から導き出せる共通する特徴としては、以下の2点が挙げられる。

1. 構成要素の少なくとも一つが、文字ではない。
2. 構成要素が全て文字であっても、その少なくとも一つが字義を表す文字としてではなく、より象形的・繪畫的、或いは象徴的な役割を果たしている。

C 説解に、構成要素とそれらの位置関係などの説明があるもの

このタイプのものは、全25條ある。そのうち16條には、次の例のように、指事とした根據となるものが示されていない。特に「斲」とその重文「斲」（例文13）では、それぞれ「此れ指事なり」、「此れ會意」とのみ注し、その違いについての説明がない。そこで、ここでは判断が分かれた要因を、ほかの例の分析を通じて考えてみよう。

13. 斲 斲也、從斤斲艸、譚長說、臣鍇曰、此指事也

斲 籀文折、從艸在欠中、欠寒、故折、臣鍇曰、此會意 【卷二 艸部】

14. 巢 鳥群鳴也、從品在木上、臣鍇曰、指事也 【卷四 品部】

「巢」は「品の木の上に在るに従う」という文字の成り立ちから「鳥の群れ鳴くなり」という字義が導き出されるということになるが、すぐにはその関係に得心がいかない。段氏は「巢」の注に、「此れ巢と同意」（二下 品部）と言う。

15. 𪔐 鳥在木上¹¹⁾、從𪔐從木、臣鍇曰、衆集也、會意 【卷七 𪔐部】

「𪔐」は「群鳥」という意味の「𪔐」が「木」の上にあるという文字の構成から、「鳥が木の上にいる」という字義が導き出され、更に「衆く集まる」という意味になる。小徐は、ここでは「會意」であるとしている。段氏は、「巢」と「𪔐」とが同意であるとしているが、「品」は「衆庶なり」（卷四 品部）という意味で、鳥が群れ鳴くという字義とは、すぐには結びつかない。まず、「𪔐（群鳥）が木の上にいる」ということから、「それらの鳥が鳴く」ということで、「隹」を「口」に變えた「品」となり、「鳥が群れ鳴く」という字義がようやく導き出される。つまり、「巢」の字義は、「多くの人」という「品」の字義ではなく、多くの鳥が口を開けて鳴いているというイメージが導き出されて、はじめて鳥が群れ鳴くという字義が生まれるのである。それ故、小徐は「𪔐」には「會意」と注しているのに對し、「巢」には「指事也」と注していると考えられる。

11) 大徐本と段注はともに「群鳥在木上也」（ともに四上 𪔐部）に作る。文字の構成から考えると、「群鳥」の方に従うべきであろう。

16. 昔 乾肉也、從殘肉、日以晞之、與俎同說、臣鍇曰、𦍋者肉開析之象、俎左旁亦象切肉也、指事 【卷十三 日部】
17. 俎 禮俎也、從半肉在且上、臣鍇曰、指事 【卷二七 且部】

「俎」は祭祀・燕禮などで犠牲を載せる臺で、切り開いた半分の肉が臺の上に置いてある形からなり、小徐は指事とのみ注する。「昔」は残った肉を日に晒して乾かす形から、乾した肉という意味になる。この「昔」に「俎と説を同じくす」とあり、文字の構成原理が同じことを言うと考えられる。「俎」は半分の肉に象ったものが「且」の上に載せられている形で、「昔」は肉に象ったものが「日」に晒されている形となっており、やはり文字と文字にならない構成要素の組み合わせとなっており、またその位置関係にも意味があるため、指事としたと考えられる。

この4條のほか、「父」(卷六 又部)、「尹」(卷六 又部)、「彗」(卷六 又部)、「甘」(卷九 甘部)、「平」(卷九 亏部)、「帀」(卷十二 帀部)、「豕」(卷十八 豕部)、「馬」(卷十九 馬部)、「𠂔」(卷十九 馬部)、「𠂔」(卷十九 犬部)、「𠂔」(卷二二 𠂔部)、「谷」(卷二二 谷部)、「𠂔」(卷二四 氏部)、「氏」(卷二四 氏部)、「𠂔」(卷二六 𠂔部)の15條には、やはり指事とした根拠となる注がない。そこで、手がかりとなる注のある條をもう少し検討しよう。

18. 本 木下曰本、從木、一在其下、臣鍇曰、一記其處也、與末同義、指事也
【卷十一 木部】
19. 朱 赤心木、松柏屬、從木、一在其中、臣鍇曰、赤心木之總也、一者記其心、棗木亦然、此亦與本末同義、指事也 【卷十一 木部】
20. 末 木上曰末、從木、一其上也、臣鍇曰、指事也 【卷十一 木部】

「本」・「朱」・「末」は、全て「木」と「一」とから成る。「一」は文字として用いられているわけではなく、「其の處を記」したり、「其の心を記」すために用いられているに過ぎない。つまり、「本」では「木」の下を指し、「末」では「木」の上を指し、「朱」では「木」の中心を示すために用いられたに過ぎず、文字の「一」ではない。従って、構成要素の字義を合せる會意ではなく、指事であるとする。

21. 母 止之也、從女、有妊之者、凡母之屬皆從母、臣鍇曰、能有守也、此指事
【卷二四 母部】
22. 𠂔 止也、一曰亡也、從亡一、一有所礙也、臣鍇曰、出亡得一則止、暫止也、指事
【卷二四 亡部】

「母」の條は、文字の構成に關する説解も、小徐の注も、その意味するところが、わからない。承培元「校勘記」は、「奸之者」の下に「一以禁之也」の5字を補うべきとする¹²⁾。段氏は「母」の説解「之を^{おか}奸す者有り」を、誤りがあるとして「女の之を^{おか}姦す者有り。一もて之を禁止す。姦す勿からしむなり（女有姦之者、一禁止之、令勿姦也）」に改め、「之を禁止し姦す勿からしむ、此れ一に従うの意を説く、母は乍と意を同くす。乍の下に云う、止なり。亡一に従う。一は之を^{さまた}礙ぐる所あるなりと。然れば則ち母の下も亦た當に女一に従うべし。一は之を礙ぐる所有るなり。其の義は互に證すべし。（禁止之令勿姦、此說从一之意、母與乍同意、乍下云、止也、从亡一、一有所礙之也、然則母下亦當从女一、一有所礙之、其義可互證）」（十二下 母部）と注する。小徐は「乍」の條に「出亡に一を得れば則ち止まる。暫く止まるなり。指事」と注する。これらのことから、「母」と「乍」はともに、構成要素として「一」を持っており、それらはいずれも文字の「一」ではなく、妨げるものを表すに過ぎないということになる。つまり、「母」も「乍」も、先ほど見た「本」・「末」などと同様に、構成要素の一部に文字ではないものを含んでいることから、構成要素の字義を合せる會意ではなく、指事であるとするのであろう。

23. 号 痛聲也、從口在𠂔上、凡号之屬皆從号、臣鍔曰、𠂔者痛聲不舒揚也、指事

【卷九 号部】

24. 丰 手之捷巧、從又持巾、凡丰之屬皆從丰、臣鍔曰、巾所持也、指事

【卷六 丰部】

「号」は「口」と「𠂔」から成る。小徐は、「𠂔」の字義を用いるのではなく、「痛聲 舒揚せざるなり」というように、痛聲が伸びゆかないさまを表すものと考えており、それ故會意ではなく指事としたのではないだろうか。段氏は「礙げらると雖も、而も必ず口を張りて其の聲を出す。故に口は𠂔の上に在り。号咷の象なり（雖礙而必張口出其聲。故口在𠂔上。号咷之象也）」（五上 号部）と述べており、構成要素の字義以外に多くの事柄が意味形成に關わっていることも、指事とした要因であるかもしれない。「丰」では、「巾」は「又（手）」が持つものを表しているに過ぎず、手が素早く巧みだという字義とは、意味上のつながりはなく、「巾」である必然性はない。つまり、文字として機能しているわけではないから、會意ではなく指事としたのであろう。

「斲」（例文13）の場合も同様であろう。説解には「斲つなり、斤もて艸を斲つに従う」とあり、「艸」が構成要素の1つとなっているが、「丰」の注の言い方を借りれば、「艸は斲つ所なり（艸所斲也）」となり、「斤」で斲ち切る対象を指すに過ぎず、「艸」の字義とは直接の

12)「校勘記」（卷中）に、「奸之者下疑有脱文。用禮記音義說擬補一以禁之也五字」とある。

つながりが無い。因って、「指事也」と注している。これに對し、重文（籀文）には、「艸の欠中に在るに従う。欠は寒なり。故に折る。」とあり、寒さの中では草は折れやすくなるという意味上のつながりが生まれ、「艸」は單なる斷ち切る対象物から、「艸」という意味を持った文字へと變化したため、「此れ會意」と注したのだと考えられる。

以上のように、このタイプのものも、一見したところ構成要素が全て文字のように見えても、その少なくとも一つが字義を表す文字としてではなく、より繪畫的或いは象徴的な——例えば「𣎵」の構成要素「品」が、「衆庶なり」という意味を表す文字としてではなく、「木」の上に集う「𪖞（群鳥）」の鳴く「口」の集まりを示すような——役割を果たしていると考えられる。

D 説解が「從某某、某象某」など、會意と象形とが組み合わされた形を取るもの

このタイプに屬するものは24條あり、そのうち「朵」の條に、象形と指事の相違點について述べるところがあるので、まず最初に見ておこう。

25. 朵 樹木垂朵朵也、從木、象形、此與采同意而下垂、臣鍔曰、今謂花爲一朵、亦取其下垂也、此下從木、其上几、但象其垂形、無聲、非全象形字也、權而言之、則指事也、采字亦下從木、上從人手爪采擷之、言采字則禾上實手爪字、有聲、此朵則木上直象下垂耳、無聲、故曰、與采同意而下垂、明不盡同也、指事

【卷十一 木部】

説解に「樹木の垂ること朵朵たるなり。木に従う。象形」とあり、注に「此の下は木に従う。其の上の几は、但だ其の垂るる形に象る。聲無し。全き象形字にあらざるなり。權^{はか}りて之を言え、則ち指事なり。」と言う。上の「几」の部分は、音聲（發音）がないので、完全な象形字ではない。因って、指事とすべきだと言う。更に説解の「此と采と意を同じくして、而して下垂す」に對しては、「采」は「木」と人の手を意味する「爪」から成り、「采」は「禾」とやはり「爪」から成る；これらの「爪」の字には、音聲（發音）があるが、この「朵」の字の上部は、ただ下に垂れるさまに象ったに過ぎず、音聲（發音）がない；それ故、「采と意を同じくして、而して下垂す」と言い、悉くは同じではないことを明らかにするのである、と説明する。つまり、「采」・「采」の上部は、形・音・義全てそろった文字であるが、「朵」の上部は音を缺いており、完全な象形字とは言えない、因って指事とすべきであると言うのである。「采」（例文26）・「采」（例文27）には「會意」と注し、「朵」には「指事」と注する要因は、その文字の構成要素全てが文字であるか否かということになる。

26. 采 捋取也、從木爪、臣鍇曰、會意 【卷十一 木部】

27. 采 禾成秀、從禾爪聲、臣鍇曰、爪禾爲采、會意也¹³⁾ 【卷十三 禾部】

また、象形の手法では文字になりにくい場合にも、指事に近いとする。

28. 𦏧 兩刃𦏧也、從木、𦏧象形、宋魏曰𦏧也 臣鍇曰、𦏧卽鉞鍇字也、兩刃形不成字、此字難以象形、又近於指事 【卷十一 木部】

ここでは、兩刃の鍇の形を象形の手法では描きづらい。それ故、「𦏧は象形」とする説解に對して、刃の場所を示す指事に近いのではないかと注している。

ところで、このタイプには、目に見える形がないものに象る場合と、形があるものに象る場合がある。

29. 尔 辭之必然也、從入丨八、八象气之分散、臣鍇曰、爾詞者、言之助也、禮曰、鼎鼎爾、悠悠爾、是必然、凡今試言爾、則敷上唇收下唇、气向下而分散也、指事 【卷三 八部】

30. 巴 蟲也、或曰、食象蛇也、象形、凡巴之屬皆從巴、臣鍇按、博物志巴蛇吞象、三歲出其骨、君子食之、無腹心之疾、山海經曰、有玄蛇食麋鹿也、一象所吞也、指事 【卷二八 巴部】

31. 牟 牛鳴也、從牛、象其聲气從口出、臣鍇曰、指事也 【卷三 牛部】

「尔（爾）」は、助字であり、「八」は發音した時、息が下に向かって分散するさまに象ったものとする。したがって、「八」は文字としてではなく、目に見えない気の流れを表すものとして作用していると考え、指事としたのであろう。「巴」の説解では、象を食べる蛇に象った象形とするが、小徐は「巳」は蛇の形に象ったもので¹⁴⁾、中の「一」は飲み込んだものを指すもので、指事であるとする。「牟」は、小徐は「指事」と言うのみだが、やはり「ム」が文字ではなく、牛の鳴く聲が口から出る形に象ったものであるため、指事としたと考えら

13) 説解では、文字の構成を形聲とする文字に、「會意」と注するのは、小徐の六書論に基づく。詳しくは（注1）に挙げた拙論を参照。

14) 段氏も、説解の「象形」に注して「巳に従うと言わざる者は、其の形の似るを取りて而て之に輔す。巳に従うにあらざるなり（按不言从己者、取其形似而輔之、非从己也）」（十四下 巴部）と言う。

れる¹⁵⁾。以上の3例は、全て目に見える形のないものに象った部分が文字ではないため、指事としている。

32. 眉 目上毛也、從目、象眉之形、上象頤理也、凡眉之屬皆從眉、臣鍇曰、欠象頤理也、指事 【卷七 眉部】
33. 果 木實也、從木、象果形在木之上 臣鍇曰、樹生曰果、故在上也、指事 【卷十一 木部】

「眉」では、眉の形に象った線の上にある「欠」が額の皺ひたいに象ったもので、どちらも文字ではなく指事であるとする。眉は目に見える形はあるが、それだけに象った象形の手法では、何の形かはわからない。その上下の目と額の皺を一緒に表すことで始めて眉を表すことができる。これは、「𠂔」(例文 28)と同じく、象形の手法では文字になりにくい場合に何かを付加して示す指事であると考えたのであろう。「果」は、「木」とその上になる實に象ったものから成る。やはり文字とまらない部分を持つため、指事としている。

以上のほかこのタイプには、「𪛗」（巻四 疋部）、「又」（巻六 又部）、「叉」（巻六 又部）、「夊」（巻六 又部）、「反」（巻六 又部）、「𠂔」（巻六 畫部）、「𡿨」（巻六 ト部）、「肩」（巻八 肉部）、「巨」（巻九 工部）、「𢆶」（巻九 日部）、「乎」（巻九 兮部）、「弱」（巻十七 彡部）、「𣦵」（巻十八 互部）、「不」（巻二三 不部）、「聒」（巻二三 耳部）、「𡳤」（巻二六 土部）、「𡳧」（巻二七 車部）の17條が含まれる。指事とする理由に關わる説明があるものも、特に説明がないものもあり、また目に見える形がないものに象るものも、形あるものに象るものもあるが、詳細は省略する。

このタイプでも、文字を構成する構成要素の少なくとも1つが、文字とならないものであることが、指事であると判断する重要な要件であることが示された。また、「𠂔」(例文28)や「眉」(例文32)では、単純にももの形に象る象形の手法では、表しきれない意味を表すのが指事であることも明らかになった。

E 説解が「從某某聲、某象某」など、形聲と象形とが組み合わされた形を取るもの

このタイプに属するものは4條ある。前述のように、小徐は「疑義篇」(卷三九)に「形の象るべき無く、勢の指すべき無く、意の會すべき無し。故に形聲を作る。」と言うように、象るべき形があれば象形の手法を用い、形がなくても指すべき勢があれば指事に依り、形も

15) 段氏はこの「牟」(二上 牛部)に「合體象形」であると注している。段氏は象形には獨體の象形と合體の象形があり、合體の象形は、文字と文字になっていないものが合わさった半會意半象形の文字とする(十五上「紱」「象形」の注)。「巴」には「己」が文字ではないことを述べるのみで、「一」についての説明がなく、どのように考えたのか不明である。

勢もない場合は義を合せる會意の方法をとり、全てない場合に始めて形聲の方法をとるという考え方をしている。したがって、聲符が意味の創出に関わる時、それは形聲ではなく會意、もしくは指事と解釋する。このタイプは、C・D 兩タイプに準ずるものであろう。

34. 牽 引前也、從牛、象引牛之縻也、玄聲、臣鍇曰、指事也 【卷三 牛部】

「牽」では、聲符「玄」が、牛を引く綱の形に象った部分の一部に用いられている。つまり、文字にならないものと「牛」からできた文字であると考え、指事としたのである。

このパターンのものは、ほかに「牢」（卷三 牛部）、「雲」（卷二二 雲部）、「樞」（卷十一 木部）がある。

これらのパターンのほか、重文に「指事」と注するものが、6 條¹⁶⁾ある。「榮」の重文「朶」（例文 6）に「亦指事也」とのみ言うように、その多くが小徐の考えを探る手がかりとなる説明がないので、省略する。

ここまで、小徐がその注の中で「指事」と明言するものは、どのようなものなのかを、象形・會意とするものと比較しながら、考察してきた。

小徐は、六書を「虚」と「實」という基準を設けて類型化し、「六書三耦説」と呼ばれる理論を提唱し、「通釋篇」の注釋において、それを実際に文字構造の分析に用いた。象形は「實」であり、指事は「虚」であるとして第一の對となし、形聲は「實」であり會意は「虚」であるとして第二の對とした。指事と會意はともに「虚」であり、その違いは、1) 指事は單體の「文」であるが、會意はそれらを組み合わせた「字」であること；2)（象るべき形がない點は共通するが、）會意は指すべき「事」もないことである。

「通釋篇」において、小徐がその注の中で「指事」と明言するものは、次のいずれかに相當する。

- 1) 構成要素の少なくとも 1 つが、文字をなしていない。例えば「寸」（例文 4）・「爭」（例文 7）。
- 2) 全ての構成要素が文字である場合にも、その少なくとも 1 つがその字義に関連するより抽象的・象徴的意味を表したり、ほかの構成要素と組み合わせたり字義とは異なる繪畫的要素の 1 つとして用いられている。例えば「奎」（例文 12）：「丰」（例文 24）。
- 3) 單純にものの形に象る象形の手法では、表しきれない意味を表すのが指事である。

16) 「帝」の重文「𡗗」（卷一 上郡）、「梁」の重文「𣎵」（卷十一 木部）、「𣎵」の重文「𣎵」（卷十一 木部）、「臣」の重文「𠂔」（卷二三 臣部）、「𣎵」の重文「𣎵」（卷二四部）に「朶」（例文 6）を加えた 6 條である。

1)・2)の特徴は、指事が単体の「文」であるという考えに基づくものであることがわかる。小徐は「疑義篇」(卷三九)で、會意は「形」も「事」もないので、「義を取りて訓を垂る」と言う。つまり、會意は「文」を組み合わせてできた新しい意味を表す「字」であるから、この「義」は基になった「文」の字義ということになり、2)はそれに基づいた特徴と言える。また、3)は小徐の言う「事」或いは「勢」とは何かを示すものと言える。

しかし、小徐の理論とその実践である注釋に問題がないわけではない。「𠂔」(例文2)について述べた際にも言及したが、同じ構造のように見える文字の間で、六書の分析が指事であるものと、會意であるものに分かれる場合があり、また特に説明がないため、分析が異なっている理由がわからない場合がある。

「𠂔」は、艸の總名を表す文字で、文字構造は「艸中に従う」となっており、小徐は「此れ指事なり」とのみ注している。「中」は「木の初めて生ずるなり」、「艸」は2つの「中」から成り「百艸なり」とされる。構造的には3つの「中」からなるとも言えるだろう。ところが、同じく3つの「石」から成る「磊」には「會意」と注している。

35. 石 山石也、在厂之下、口象形、凡石之屬皆從石、臣鍇曰、口音圍
磊 衆石也、從三石、臣鍇曰、會意 【卷十八 石部】
36. 木 冒也、冒地而生、東方之行、從中、下象其根、(略) 【卷十一 木部】
林 平土有叢木曰林、從二木、(略)、臣鍇曰、叢木、故從二木、平土、故二木齊
森 木多兒、從林從木、(略)、臣鍇曰、木多、故上出也 【卷十一 林部】
37. 犬 狗之有縣蹠者也、象形、(略)、臣鍇曰、蹠足趾高、象犬之長體垂耳也
猋 犬走兒、從三犬、臣鍇曰、飈旆從此、會意 【卷十九 犬部】
𤝵 兩犬相齧也、從二犬、(略)、臣鍇曰、會意 【卷十九 𤝵部】
38. 魚 水蟲也、象形、(略)
𩺰 新魚精也、從三魚、不變𩺰、臣鍇曰、三衆也、衆而不變、是𩺰也 【卷二二 魚部】
𩺱 二魚也、闕、(略) 【卷二二 𩺱部】

「𩺰」(例文38)の注に「三は衆なり」とある。したがって、同じ構成要素を3つ重ねた「磊」が多くの石という意味になり、會意とされるのは、その意味が容易に理解できる。しかし、「犬」を3つ重ねた「猋」が、多くの犬ではなく、「犬の走る兒」という意味を表すには、犬が群れて走るさまの象形などの抽象化が必要となる。ところが小徐は、これも會意とする。では「𠂔」を指事とするのと、どのような相違があるのだろうか。「𩺰」も、「魚」を3つ重ねて、多くの魚ではなく、新鮮な魚という意味とするが、指事・會意の別は注していない。「森」は最も「𠂔」に近いが、やはり指事・會意の別は注しておらず、どのように考えていたかは

わからない。このように同じ構造のものに對して、指事としたり、會意としたり、または判斷を示さないなど、一貫していないように見える例が散見される。

このほか、注釋の中には、文字の一部の構成要素が文字となっていない場合にも、指事ではなく會意とする¹⁷⁾など、ここまで見てきた原則と矛盾するものがある。

ここで、先に挙げた古氏の指事に對する評價について検討しよう。古氏は前述のように、小徐が文字ではない構成要素を全て指示性の符號と見なし、全て「虚」としていると批判し、指事の「虚」の部分の働きは、何かを指し示すことにあって、形を構成することにはないと述べている（84頁参照）。このうち前半部分に關しては、以上見てきたことと一致している。後半部分——即ち、指事の「虚」の部分の働きは、何かを指し示すことにあって、形を構成することにはない——はどうであろうか。

小徐の分析が正しいものとして古氏が挙げた例は、「上」・「下」・「寸」・「肘」・「甘」・「本」・「末」・「朱」で、文字ではない構成要素が、文字である構成要素に關連する「場所」を指し示すものばかりである。指事の「虚」の部分の働きがこのような「場所」を指し示すことのみであるとするのは、指事の働きを限定しすぎではないだろうか。

裘錫圭氏は、「大」¹⁸⁾について、實物の形（人の形）に象って作られているが、表しているのは象った實物の名稱ではなく、象ったものに關連する「事」の名稱であり、この點では「上」・「下」と近い；それ故、「大」を指事とする人も、象形とする人もいると指摘している。また、鄭樵が『通志』『六書略』の中で「上」・「下」を象形の中の「象位」に分類していることも挙げ、それもまた全く道理がないわけではないと述べている。このように、何を「事」とするか、「虚」とするかは、異なる判斷基準があり、古氏の基準に合致しないことが、即ち過ちであるとは言えないのではないだろうか。むしろ問題は、「通釋篇」に於いて散見される矛盾・判斷の亂れではないだろうか。

しかし、象形・指事・會意の3類の區別には問題が多いことも事實である。裘氏は六書說を論じて、「按照六書說，用意符造成的字，即我們所說的表意字，分成象形、指事、會意三類，但是這三類之間的界線實際上並不明確。（六書說によると、意符を用いて文字を作る、即ち我々の

17) 例えば、「牀 安身之几坐也、從木爿、臣錯曰、牀即以安身也、春秋左傳曰、蓬子馮僞病掘地下冰而牀焉、至今恭坐則榻也、故從木爿、爿（女革反、牀所從）則疾字之旁、象人之斜身有所倚著、實不成字、至于牆牀戔竝從牀字之省、形竝在右、其左竝曰聲、李陽冰妄言木字右旁爲片、左旁爲爿、云片音牆、且說文竝無片字、又牀從爿、與字殊異、又片字直、而爿字斜欹、則陽冰之謬妄、不言可悉也、會意」（卷十一 木部）では、この「爿」は「人の身を斜めにして倚著する所有るに象る、實に字を成さず」と言い、「牀」の字は「木」と字を成さない「爿」から成るとする。つまり、「牀」は2つの文字の字義を組み合わせたものではないにもかかわらず、指事ではなく會意としている。このように、指事であるとするものと、會意とするものに、ここまで見てきた原則と矛盾するものが散見される。

18) 裘錫圭『文字學概説』『六 漢字基本類型的劃分』1988年 商務印書館 98-99頁。

言うところの表意字は、象形・指事・會意の3類に分かれる。しかしこの3類の間の境界線は、事實上決して明確ではない。)」¹⁹⁾と指摘する。ここで裘氏は唐蘭氏の「三書説」(象形文字、象意文字、形聲文字)を挙げて、象形と象意を分ける意味が無いことなどを論じる。更に陳夢家氏がやはり象形と象意を區別することに意味が無いとして、象形・假借・形聲という新しい「三書説」を提唱したことに觸れ、この考えに基本的に賛成し、象形を表意字とするなどの修正を加えた「三書説」²⁰⁾を提唱している。

小徐は、構成要素の少なくとも1つが文字ではない、或いは構成要素が表す意味がより繪畫的・象徴的な場合、それは構成要素の持つ意味を併せて新しい意味を持つ文字を作る會意ではなく、指事であるとする。象形と指事は、具體的にものの形に象るのか、そこに象徴的・指示的意味があるのかの違いであるというように、自らの考察した基準によって判断している。問題は、その基準が必ずしも一貫しているわけではなく、判断に揺れがあることであろう。ただ、その点については、裘氏の指摘するように、象形・指事・會意の3類については、その境界線が必ずしも明確ではなく、それ故、近年はこれらを區別せず全て表意文字とする考え方が出てきたのであろう。

小徐は、最初に『説文』の許敘の六書を理論化し、後の研究の端を開いたと同時に、圖らずもその問題點も示したということになろう。

19) 注 18) に挙げた裘氏の書の 98 頁。

20) 同上書 104-107 頁参照。